

警邏ヨーテイ

渡邊 大三

いろいろ思うことはあるがそれは終わらない。良くも悪くも。

3/25

山の陰からの斜陽が顕わになる。光の色ってのはどう表現して良いのかわからないが暗闇の中でこそ光は光らしいと当たり前のことを思う。犬は疲れたのか、さっさと助手席で丸くなる。

2年ぶりのそこは、驚いたことにいつもの通りだった。景色も変わらず静まり返っている。それを感じられることは嬉しいので涙を一粒。

帰りは鼻と口から山の空気と雪塊を存分に味わう。なかなか手強く、歓迎されているに違いない。

三佐川さん、長倉さん、K君、Sさん、ビヨン(犬)と羊蹄山喜茂別ルートへ。K君歩き始めて20分程で具合が良くないそうで下山。丁度2年前に長倉さんと三佐川さんとココ登ったのだが、二人とも記憶曖昧モコモコっていうか覚えてない事柄についてしゃべくりながらc1400までスキーで登りそこからツボでピークまで。途中何組か追い抜いたり、途中上から滑ってきたりといろいろだ。スキーをピークまで背負うのは自分。スキーデポしたら登る意欲を無くしてピークまで行けないと踏んだのだ。途中の尾根はカチンカチンすぎてブーツで蹴り込んでもつま先すら入らないくらいだ。犬は頻繁に行方不明。そんなコンナで皆で頂上。何度でも嬉しい。ピークからc1500までのいつときは雪も良くて楽しいが、沢のほうへ行きすぎると甘く危険な斜面なので途中でやめといた。昨年の明日に京極で雪崩事故が発生している。

C1400からは皆でモナカを喰う。膝がねじれそうな感じのアレだ。「お、イイ感じだ、、、」と思ったらクラッシュする。

そんな中でも満足だ。車まで滑るとビヨン(犬)は若干ヘトヘトだった。「お前とまた裏山登れて嬉しいよ、しかも頂上まで行けたよ」って言ったところでコイツの頭中は車の中で寝ることと喰い物のことしか頭にない。彼は明日もあるのを知らない。

3/26

再び。光を背負って歩きだす。やがて昨日の場所が対岸に見える。達成感・満足と、過去など色々な思いが編み込まれていき雪の上に一つの像を作り出し手招きしては消えていく。故郷は深く遠く広がりを持ち常に懐かしく常に新しい、人はなかなか真の故郷に届かないということを意味しているのか。

渡部さん、睦男さん、吉成さん、橋場さん、ビョン（犬）と真狩ルートへ。犬の耳かきをしていて渡部さんからの「予定より随分早く着いて、先に登っている」旨の体育会系のメールを見逃す。

30分以上遅れてのスタート。南面ゆえの陽光で背汗ダラなのか心なしちょっぴり急いでしまっているのか。道中何組か追い抜いたが、北稜チームは見えても追いつくまで時間がかかり、これもなかなか手強い。

橋場さんは初めての冬の羊蹄山らしい。渡部さんが「橋場さん、今日は是非羊蹄サミッターに、、ブツブツ」と言っている。吉成さんは新人？いるのにズコズコ容赦なく先に行く。睦男さんは急斜面なので(上まで行っても)滑りたくねえなあとのこと。

「こんな雪質の日だしどうせなら毎回ピークから滑りたい」と思うが、自分のイケイケモードでパーティーの動向にバイアスをかけるのも趣がないような気がするので霞で出来た潜水艦の沈黙で歩く。犬は頻繁に行方不明。

んで今日も頂上(真狩外輪)、昨日の喜茂別頂上が見える。外輪直下の帰りは岩稜帯はガリガリで危険な段差があるが、俺ぁ好きです。にしても橋場さんのスキー上手さに触発されて人知れず派手に転倒。

下山後に山の姿を振り返って見る！というのは格別でビール欲し欲し。足がパンパンになるまで滑らせてくれる山はそうない。やはり羊蹄山はkingである。

思うことは本当にいろいろある。刹那に永劫にものを捉えても、それから一朝一夕逃れられない。最近頭のなかに垂れる幕「我思う、故に我あり」。その意味不明なことばを少しでも理解したような気がしたら、その瞬間何かに触れている。

自分のことは自分にしかわからなく、真のところは自分ですらわからない。人は意識の発生と共に、常にあるところに向かい始める。最終的には人は一人で自分を背負っていくしかないというカルマ。

そんなありふれた2 days。